

文学の中のかくれんぼう

— 絵本を対象として —

Hide and Seek in Literature
— A Study of Picture Books —

中 川 香 子*

要 約

かくれんぼうは、多くの絵本の題材となっている。それは、かくれんぼうが時間や空間を超えた普遍的な遊びとして、人間の心の真実を包含しているからであろう。この小論では、かくれんぼうを題材とする38冊の絵本を「1. 自然の中のかくれんぼうをとりあげた絵本」、「2. かくれんぼうそのものがテーマになっている絵本」、「3. かくれんぼうと関連づけた絵本」の三つに分類し、リストをつけるとともに、その特徴について述べている。分類の2と3については、リストの中から数冊を取り上げ、それぞれのかくれんぼうの意味や絵本の楽しみ方について考察した。その結果、読者はこれらの絵本において、写真や絵の中に隠れているものを想像したり探したりすること、登場人物といっしょになって遊ぶこと、かくれんぼうを通して不思議な世界に行ったり冒険をしたりすることなどを楽しむことが分かった。そして子どもは、このような絵本を通してかくれんぼうのテーマを体験し、そのメッセージを受け取る。そのことは、彼らの自我の成長に役立つと考えられる。

キーワード：絵本の中のかくれんぼう、絵本の特徴と楽しみ方、かくれんぼうと自我の成長

はじめに

「もういいかい」「まあだだよー」
「もういいかい」「もういいよー」

かくれんぼうを遊ぶ子どもたちの声が、今日も聞こえてくる。そこは、大学の中にある小さな森。構内の幼稚園や保育所の子どもたちが、大好きな遊び場だ。彼らは、この森でかくれんぼうをして遊ぶのである。

森は、精神の変容の場所でもある。おとぎ話では、しばしば森が重要な舞台となる。白雪姫、ヘンゼルとグレーテル、千びき皮……。はたまた、アルカイックな社会における成年式がとりおこなわれるのも、森のなかである。おとぎ話の主人公や成人しようとする若者は、森のなかで非日常的な生活や体験、修行などに耐え、新しい生命や知恵、魂をもった大人へと生まれ変わる。そして、現代の子どもたちもまた、身近にある森のなかで軽やかに遊びながら、そうとは知らずに精神の核をつくっている。

私が『かくれんぼう』¹⁾を書いたのは、かれこれ20年前になる。子どもがかくれんぼうを遊ばなくな

るのではないかという危機感があったからだ。そのことは、私たちがたんに一つの遊びを失うことだけではない。なぜなら、かくれんぼうのような伝承遊びは、ことのほか深刻なテーマを包含しており、子どもが「人として育ち、生きる」ためになくてはならないものだからである。

けれども、そんな私の心配は杞憂だったらしい。あれからずいぶん月日がたったが、かくれんぼうを遊ぶ子どもの声は、私の耳に届きつづけている。かごめかごめや花一匁、通リゃんせなどの伝承遊びがあまり遊ばれなくなったのに比べると、かくれんぼうはよく遊ばれている。

そして、絵本の題材としてもかくれんぼうは人気がある。作家たちもまた、この遊びを手放さずにいたようだ。かくれんぼうは作者の心をどのようにとらえ、想像の翼をどんな風に広げさせたのだろうか。この小論では、絵本に描かれている様々なかくれんぼうを読み解きながら、そのテーマや価値について考察する。

* Kyoko NAKAGAWA 聖和短期大学 教授

1) 『かくれんぼう』人文書院 1993年

1 自然の中のかくれんぼうをとりあげた絵本

この分類にあてはまるのは、いろいろな自然のなかに隠れている虫や魚、動物、植物などを見つけて楽しむ絵本である。絵や写真によって構成されており、ストーリー性はあまりないのが特徴である。

かくれんぼうで実際に我が身を隠したり、仲間を見つけたりすることと同じように、絵や写真のなかに隠れているものを見つけ出すことは、おおいに子どものころを引きつける。そこには、隠されているものを自分の力で発見するおもしろさや見つけれたとときの満足感があるからだろう。どうじに、色々な「もの」や「かたち」を覚えつつある子どもが、自分の知っているそれらを絵本のなかに見いだすことの喜びもある。それは、知り得た「もの」や「かたち」を絵本の中に再確認することであり、そのことによって、子どもは自分の知識を確かなものとして自身の中に根付かせていくことができる。

おそらくこのような絵本は、大人によって読み聞かせてもらうというよりも、親や保育者、友だちと会話をしながら見ることが多いだろう。もちろん、一人で探すことに没頭しながら、あるいは友だちといっしょに遊びながら見ることもできる。いろいろな見方や楽しみ方があるといえよう。

また、これらの絵本からは、生き物の生態や特徴、擬態等について学ぶこともできる。隠れるという行為は、子どもの遊びだけではなく、生き物が生きていくために必要な営みであり、そのような自然界のさまざまな不思議に子どもの心が開かれていく機会ともなるだろう。また、虫や魚、小動物に興味をもつ子どもにとっては、写真によってそれらの形や色を観ることで、正確な知識を得ることもできる。

よく似ている色や形などの中うまく隠れているものを探しだすには、視覚的な認知の発達に裏付けが必要である。私が幼少期にかかりつけだった医院には、三頭の馬が描かれた油絵が飾られていた。しかし当時の私には、それが馬の絵だとは分からなかった。輪郭線のない重なり合った三頭の馬に加えて、背景までもが同じような色相や彩度であったため、馬の形を認識できなかったのである。

多くの絵本——特に赤ちゃん絵本は、対象物が背景と識別しやすく、はっきりした色とシンプルな形で描かれている。輪郭線を施したものも多く、形が

いっそう認識しやすい。まだ乳児の視力は完全ではないので、明暗のコントラストがあり、形が認識しやすいということが考慮されているからである。

淡い色合いでぼかし絵のように描かれた「いわさきちひろの絵本」が、小さな子どもには分かりにくいというのも形の認識の発達によるものであろう。赤ちゃんのときから絵本に親しんできたS子も、2歳半くらいまでは、いわさきちひろの『おふろでちゃぷちゃぷ』や『もしもしおでんわ』（いずれも文：松谷みよ子、童心社）があまり好きではなかった。おそらく絵が分かりにくいからだと思われるが、3歳に近づくにつれて理解できるようになってきた。この分類の絵本では、隠れているものを見つけないのに、優しすぎるとつまらないし難しすぎると興味を失うので、絵や写真には配慮や工夫が必要となる。

この分類に該当する作品では少数と思われるが、なかにはストーリー性のある作品もある。『新自然きらきら9 かくれんぼ』（リスト1-④）がそれである。ここでは、実際のカエルの写真をうまく用いて、あたかも、二匹のカエルがかくれんぼうを遊んでいるかのように作られている。写真とそれに添えられた言葉がよく合っており、ほんとうにカエルたちが遊んでいるようにみえる。

2 かくれんぼうそのものがテーマになっている絵本

かくれんぼうそのものが題材となっている絵本は、この遊びのもつテーマを読み手に伝える。子どもにとって最初のかくれんぼうの「いないいないばあ」は、乳児が短時間の記憶ができるようになり、目の前から一時的に母親（親しい人）がいなくなってもすぐに戻ってくることを信じられるようになって成立する。それはほんの一瞬の孤独の体験であるが、子どもの自我の成長とともに、しだいに孤独に耐えられる時間は長くなっていく。かくれんぼうでは、隠れるものもオニもそれぞれの孤独に耐えられるようになって、はじめて本格的に遊ぶことができる。そして、互いの孤独の後に訪れるオニの発見による仲間の再会。子どもは、遊びを通して象徴的に「死と再生」を体験するのである。以下にいくつかの絵本をとりあげ、その特徴と魅力を述べる。

(1) 『いないよいいないよ』（リスト2-①）

『いないよいいないよ』は、あまんきみこの赤ちゃん

ん絵本シリーズの中の一冊である。絵本では、読者がオニになって、木の陰に隠れてしっぽをのぞかせている動物や男の子を見つけていく。「みいつけた」でページをめくると、隠れている動物たちが木の陰から飛び出してくる。構成も題名も『いないいないばあ』²⁾によく似ている絵本といえる。しっぽが見えているので、木の陰には必ずだれかが隠れているという期待感があり、それを前提に「だれだろう？」と想像する楽しみが続く。ページをめくると「やっぱり○○だった!」と当てられたり、「そうか、○○だったんだ」と発見したりするおもしろさが待っている。最後には全員が木のまわりを囲み、仲間の再会を喜び合うが、これはかくれんぼう遊びになくはならない場面である。もし、だれかが見つからないままであれば遊びは終わらないし、読者は不安のなかに置き去りにされる。

この絵本では、どのページにも中心に木が描かれている。木について『世界シンボル事典』には、次のようにある。「地に根を張り天に枝を伸ばしているので、人間と同じように『2つの世界に属する存在』であり、上-下を結びつける仲介者とされている。多くの古代文明では、特定の木や林苑全体が神々や精霊などの超自然的な存在のすみかとして崇められただけでなく、木は、その周囲に宇宙全体が秩序づけられた宇宙軸と見られることも多かった。」³⁾

一般的にかくれんぼうでは、木は遊びの始まるの場所であり、オニが数をかぞえるところであり、タッチするポイントであり、最後に仲間が帰ってくる場所、つまり「遊びの中心」である。この絵本では、木を中心に遊びが展開し、木の存在によって遊びの秩序が守られており、まさにそれは「宇宙軸」「世界軸」である。『いないいないばあ』は、まだ本格的にかくれんぼうを遊ぶことができない赤ちゃん向けの絵本でありながら、この遊びに欠かせない要素を備えているといえよう。

(2) 『うずらちゃんのかくれんぼ』(リスト2-④)

『うずらちゃんのかくれんぼ』では、仲良しのうずらちゃんとひよこちゃんが交代でオニになったり、隠れたりしてかくれんぼうをして遊ぶ。始めにジャンケンをしてオニを決める、「もういいかい」「まあだだよ」の掛け合いも行われるなど、遊びの

手続きがきちんと踏まれている。遊びが始まると、二人はそれぞれの体の色や形を生かして花や木の中に隠れるのだが、その度にハプニングが起きて見つかってしまう。カモフラージュ的に二人が隠れるのも愉快的な仕掛けとなっている。

かくれんぼうは、遊ぶ者同士に信頼関係がなければ遊ぶことができない。隠れる者は「オニはきつと見つけてくれる」、オニは「仲間を見つけるまでみんなは待っていてくれる」と思い合える信頼こそが、この遊びを成立させ、そのおもしろさを支えているからである。ここでは、うずらちゃんとひよこちゃんはいかに仲のいい友だちであることが想像できるし、その仲良し二人だけで遊ぶので、子どもは安心してオニといっしょに隠れている相手を探することができる。この絵本は、親しい人、大好きな人、信頼する人と遊ぶかくれんぼうがどんなに楽しくて、心が満ち足りるかを読者に伝えてくれる。

終盤、二人は突然の雨に見舞われる。今までの元気もどこへやら、すっかり心細くなっている二人をお母さんたちが探しにきてくれるところで絵本は終わる。それは、自分たちが困った状況になっても、かならずお母さんが助けてくれるという暗示でもあり、ここにもう一つの安心がある。

(3) 『どんぐりくんのかくれんぼう』(リスト2-⑥)

どんぐりくんの仲間、総勢18人がかくれんぼうをするお話である。かくれんぼうの絵本では圧倒的に登場人物が多く、それぞれの服装や表情、様子の違いに着目するのもおもしろい。この絵本には見返しが無く、扉のタイトルページからお話が始まる。扉にはみんながジャンケンで鬼決めをする場面が描かれており、ページをめくるとオニになったどんぐりくんが木のそばで「もういいかい!」と仲間呼びかける。仲間たちは「まあだだよ。」と答えながら、それぞれ隠れ場所を探して走っていく。そして、みんなの「もういいよ。」の応答でオニは仲間を見つけに行く。

どんぐりたちが隠れるのはいろいろな森——おおきいもり、ちいさいもり、おいしいもり、しかくいもり、あぶないもり、ねむいもり、まぶしいもり、きみのわるいもり、とおいもり——である。それぞれの森は、形や色や表情などの描写によってその特徴が表現されているので、子どもは言葉(森の名前)

2) 『いないいないばあ』文/松谷みよ子 絵/瀬川康男 童心社

3) ハンス・ビーダーマン著 藤代幸一監訳『世界シンボル事典』121ページ

と絵による具体的なイメージを結びつけながら絵本を見ることができる。オニは一つ一つの森で仲間を探し、最後は「とおいもり」で全員を見つけることができる。どんぐりは一人一人特徴があるので、だれが見つかって、だれが見つかっていないかを確認していくのも楽しい。

この絵本では、鬼決めに始まり、「もういいかい」「まあだだよ」「もういいよ」の掛け合い、オニが最後まで頑張って仲間を見つける、そして全員がそろそろという遊びの手続きや作法がきちんと守られている。伝承遊びは、基本的なルールを守って遊びながらその面白さを体験することによって、遊びのメッセージを受け取ることができる。オニが探すのを諦めて帰ってしまったり、隠れている子どもがどこかへ行ってしまったりしたら、かくれんぼうは途端にひどく淋しくてつまらない遊びに堕してしまう。そして、いったん遊びの構造が壊れてしまったかくれんぼうは、それが内包している本来の力を喪ってしまうのである⁴⁾。この絵本の一番の魅力は、かくれんぼうを遊ぶ18人のどんぐりたちと色々な森の出会いであるが、同時に正しい遊び方を描いているところでもある。

(4) 『もりのかくれんぼう』(リスト2-⑩)

『もりのかくれんぼう』は、林明子の絵が幻想的で美しい絵本である。文章が長く物語性も高いので、年長向きである。

主人公のけいこはかくれんぼうをして遊びたかったが、おにいちゃんや友だちとばかり遊んでいた。けいこは不満な様子で兄とともに帰っていくが、急に走り出したおにいちゃんを追いかけて生垣をくぐると、そこには見たこともない大きな森が広がっていた。一人心細い気持ちで歩いていくと、木の葉と同じ色をした男の子——「もりのかくれんぼう」が立っていた。けいこは「もりのかくれんぼう」や森の動物たちとかくれんぼうをすることになる。探してきたおにいちゃんの声でけいこは見慣れた場所に戻ってくる。

森は、まだ人の手が及んでいない場所である。そこは、生い茂った木々が光を遮り昼間も薄い闇に覆われ、静けさに包まれている。それゆえ、怖くもあるが、どうじに神秘的で心が鎮まる場所でもある。森には、小鳥やリスといったかわいい生き物もいる

が、人を襲う動物も潜んでいる。おとぎ話の森には、魔女や巨人、小人などの超自然的な者も住んでおり、彼らは主人公を恐れさせる存在であると同時に、知恵を授けたり、窮地から救ってくれたりもする。すなわち、森は両義的なのである。

また、伝統的な社会では、森はイニシエーションの場所である。若者は成人として認められるために、その非日常的な空間で神話を学び、身体的・精神的な苦痛や恐怖と対決しなければならない。おとぎ話の主人公も森の中での様々な困難を経て成長し、最後に幸福をつかむ。深層心理学的に言えば、森は精神の変容の舞台と解釈されている。

けいこがタイムスリップして入り込んでしまった森もまた、不思議に満ちた場所であった。かくれんぼうへの思いが呼び出してしまったような「もりのかくれんぼう」と、けいこはそこで出会う。そして森の仲間たちとかくれんぼうが始まる。「かくれんぼするもの、よっといで!」という仲間集めの呼びかけに始まり、ジャンケンでオニを決め、数をかぞえるところまでは遊びのルール通りだが、「もういいかい」「まあだだよ」の掛け合いはない。さて、けいこがオニになって探し始めるが、「もりのかくれんぼう」も動物たちもみごとに隠れるので、読者の方もを見つけるのに真剣になってしまう。林明子の絵は、現実のかくれんぼうにおけるオニの孤独な作業——探すこと——を絵本の中で体験させてくれるのである。おそらくこの絵本に見入る子どもは(大人さえも)、すっかり自分も森の中に入り込んでしまったような気持ちになるだろう。

かくれんぼうに夢中になるけいこだが、なんといってもそこは異界である。自分が生活する現実の世界に戻らなければならない。そんなとき、兄がけいこの名前を呼ぶ。先ほどけいこを仲間はずれにした兄は、妹を心配するやさしいおにいちゃんでもあった。『うずらちゃんのかくれんぼ』のような年少向きの絵本では、主人公たちを探すのは母親であったが、ここでは兄がその役割をにう。主人公は、母親から離れて、兄弟や友だちとの世界を共有できるくらいに成長した子どもなのである。森から現実の世界に戻り不思議がるけいこに、兄は、今団地のあるところが以前は森だったと話してくれる。

子どもの心が成長するということは、母子一体の

4) 筆者は『かくれんぼう』(人文書院 1993年)で、かくれんぼうのオニや隠れる者の孤独の意味とそれがもたらす内的成長について述べている。

世界から抜け出して、しだいに知性を身につけ感情を成熟させながら、意識的な自我を発達させていくことである。いまだその途上にある子どもは、意識と無意識の領域、あるいは現実と空想の世界を行き来できる自由な、かつ危うい存在である。けれどもそんな子どもだけが、過去の豊かな世界に足を踏み入れることができるのであろう。

けいこたちの暮らす団地は、かつて森であった。人の手がおよんでその姿形を奪われた森は、本来の魅力や魔力を失い、今や人を住ませる建物の土台として沈黙している。けれどもその「場所」は、人知れず森の記憶と力を持ち続けてきたのであろう。かくれんぼうは、時の流れを超えて、その「場所」への入り口を開けさせる呪文だったのかもしれない。この絵本は、けっして文明批判でも時代錯誤をよしとするものでもないが、私たち人間が閉じてはならない「歴史の窓」⁵⁾の大切さを教えてくれる。「動物はどこへ行ったの」と問うけいこに、兄は「もっと山奥に引っ越したのだろう」と答える。けいこは思う。「かくれんぼうさんもきっとどこかの森に隠れているんだ。だからきっとどこかで会える」と。かくれんぼうという時間的・空間的・心理的に普遍性をもつ遊びは、私たちを歴史に繋ぎ、身体を通してその知恵を手渡してくれる。読者は、「もりのかくれんぼう」を生かし続けようとする主人公にそのことを教えられる。

(5) 『もりのなか』(リスト2-⑫)

『もりのなか』は、絵本としては古典といえるが、今も子どもたちに読み続けられる名作である。絵本には珍しく表紙以外は白黒で地味な印象を受けるが、色にあふれた現代では、それがむしろ新鮮に感じられる。主人公を先頭に、動物が次々に加わって行列が長くなっていく様子が、横長のページに動きとリズムを作り出しながら描かれている。

これも舞台は森。男の子は、紙の帽子をかぶりラッパを持って森へ散歩に出かける。帽子とラッパで変身した男の子は、もうその時点でファンタジーの主人公として物語の中へ歩き出す。男の子は一人で散歩に出かけていくが、それは、自立へ向かう子どもがしばしば行う小さな冒険である⁶⁾。そして、

帽子やラッパは、彼の冒険を勇気づけてくれる大事な小道具である。帽子は権威のシンボルとなり、ラッパは自分の存在を知らしめ仲間を集める道具として活躍する。

男の子が森の中に入ると動物たちが次々に彼の散歩についてくる。はじめはらいおん、次に2頭の象の子ども、それからくま、かんがるーの親子、こうのとり、2匹のさる、最後はうさぎ。そのほとんどの動物(こうのとりとうさぎ以外の動物)は言葉を話し、男の子の散歩に同行する了解を得る。そして、行列のメンバーは、それぞれ以下のような様子でついてくるが、うさぎだけが何も持たず音も出さない。

- ・ほく——帽子をかぶり、ラッパをふく
- ・らいおん——髪をとかす、吠える
- ・ぞうのこども——セーターやくつを身につける、鼻をならす
- ・くま——ピーナツとおさじを持参する、うなる
- ・かんがるーの親子——太鼓を持参し、たたく
- ・こうのとり——くちばしをならす
- ・猿——よそ行きの洋服を着る、大声で叫んで手をたたく
- ・うさぎ——何も身に付けず、何も持たず、声や音もださない

うさぎ以外の動物は自発的に行列に参加しようとするが、うさぎだけは男の子に「こわがなくていいんだよ、きたけりゃほくとならんでくればいいよ」と声をかけられ、最後に出会ったにもかかわらず、先頭の男の子と並んで歩く。うさぎ以外の動物は言葉を話し、身なりを整え、おやつを持参し、テーブルに座り、三種類の遊びを遊ぶ等、その発達や文化水準は男の子と同レベルであると考えられる。しかし、うさぎはそれらの用件を備えていない。そのことは男の子より幼い存在であることを想像させ、幼少の子どもも仲間に加えて遊んだかつての異年齢集団を思い起こさせる。

一行はおやつを食べた後、「はんかちおとし」と「ろんどんばしおちた」を遊び、最後にかくれんぼうをする。「はんかちおとし」は「かごめかごめ」と同じように輪になって遊ぶ遊びであり、「ろんど

5) C・ダグラス・ラミスは『影の学問窓の学問』の中で、真理の探究には「外部に通じる三つの窓、すなわち過去へ通ずる歴史の窓、現在ある他の社会へ通ずる窓、そして純粋な理論の世界にある理想社会へ通ずる窓」から物事をながめることが必要だと述べている。22～23ページ

6) 泉鏡花の『竜潭譚』には、母親代わりの姉のもとから家出した男の子が、日頃遊ばない子どもたちとかくれんぼうをする様子が描かれている。

んばしおちた」は日本版でいえば「通りゃんせ」である。そして「かくれんぼう」は言うに及ばない。このような遊びは世界中で伝承されており、アメリカにおいても同様であることがわかる。

最後のかくれんぼうでは、男の子がオニになり「もいういいかい!」と言って目を開けるが、そこには動物たちの姿はなく探しにきた父親が立っていた。父親が隠れている子どもを探す絵本は、今回対象にした中ではこの1冊しかない⁷⁾。絵本の男の子は、絵で見る限り5歳前後だろうか。子どもはその年齢になると母親との親密な関係から抜け出して、父親や兄弟、仲間へと人間関係が広がっていくので、父親の登場も自然だと考えられる。父親は息子が動物たちと遊んでいたという説明を受け入れつつも、家へ帰ることを促す。さらに、「きっと、またこんどまでまってくれるよ」と子どもの気持ちに寄り添うので、男の子は納得して父親の肩車で帰っていく。情緒に傾かず冷静でありつつも子どもの世界を見守る父親の存在は、この絵本に清々しい暖かさを与えている。

3 かくれんぼうと関連づけた絵本

ここにあげるものは、かくれんぼう遊びそのものが題材になっているものではなく、あたかもかくれんぼうをしているようなお話、隠れているものやいなくなったものを探すお話などである。その中のいくつかをとりあげよう。

(1) 『カクレンボジャクソン』(リスト3-①)

この絵本は、イングランドの絵本作家によるものである。各ページが形や色にあふれており、見ているだけでも楽しい絵本である。

社会から隠れるようにひっそりと生活するジャクソンは、自分の平穏な生活を守るために、その場にとけ込む保護色のような洋服作りに精を出してきた。そのおかげで彼は洋裁の腕をあげていったのだが、実際には、孤独な生活に閉じこもっていた。そんなジャクソンに転機が訪れる。お城のパーティに招待されるのである。いったん彼は、大勢の集まる華やかな場には出られないと判断するが、自我の拘束から自由な夢は、ジャクソンの心の城壁を打ち破る手伝いをする。夢は彼に、宝石に輝くお城のイメージを授けるのである。夢は、放っておけばすぐ

に記憶から消えてしまう儂いものでしかない。けれども、ジャクソンはそうしなかった。夢からヒントを得て、宝石を散りばめた美しい洋服を作り、お城へ出かけるのである。保護色の洋服というのは今まで通りの発想だが、出かけた場所はこれまでにないところだった。実際には、夢とは違って会場が庭だったので、華やかな洋服は目立ってしまい作戦は失敗にみえた。しかし、それが彼の人生の転機となる。王や王妃に洋裁の腕を認められたジャクソンは、その後、彼の才能を自分だけのためだけでなく、洋服屋として多くの人々のために生かすことになるのである。

ジャクソンは洋服屋として成功し、アイデンティティを確立することができた。そのためには、傷つきやすい自分を守って暮らすだけでなく、他者との関係や社会的な活動が必要だと分かる。絵本前半、ジャクソンが一人暮らしをしている場面に「やっぱり、いえのなかがいちばん」とあり、「一人ぼっちで寂しい」という言葉は出てこない。しかし、最後のページにはこうある。

「カクレンボ・ジャクソンには、ともだちがたくさんできました。」

「カクレンボ・ジャクソンは、まいにちたのしくはたらいしています。」

ジャクソンは、以前の暮らしよりも今の生活の方を気に入っていることが想像できる。人には隠れていたいときがあるが、隠れ過ぎてはならない。かくれんぼうを遊ぶときのように、身現しのタイミングが肝心である。この絵本はジャクソンを通して、若者が社会の中でかけがえのない自分を発見し、「何者かとして」生きるよう励ましてくれる。

(2) 『たまごのあかちゃん』(リスト3-②)

これは、『いないいないばあ』と同様の構成になっている。まだ孵化していない卵がでてきて、それぞれの赤ちゃんが卵の中でかくれんぼうをしているという設定である。「あかちゃんはだあれ? でておいでよ」という文章があり、ページをめくるといろいろな生き物が生まれてくる。『いないいないばあ』(前述)は1967年、『たまごのあかちゃん』は1977年、『いないよいないよ』(前述)は1983年の発行であるが、このような構成は赤ちゃん絵本として一つの形式を確立しているといえよう。輪郭線が明確で分か

7) 探しにくるのが母親という絵本は、『うずらちゃんのかくれんぼ』(リスト2-④)、『かくれんぼううさぎ』(リスト3-③)、『かくれんぼしましよ』(リスト2-②)があり、いずれも年少向けの絵本といえる。

りやすい絵も赤ちゃん絵本としてふさわしい。

(3) 『さがしてさがして みんなでさがして』(リスト3-⑦)

この絵本は、アメリカの作家によるものである。ある朝、母鳥と一緒にいた鴨の8羽のひよこのうち1羽が、蝶々を追いかけていなくなってしまう。母親は残りのひよこを連れて、「うちのこみかけませんでしたか」と川のあちこちを尋ねてまわる。左右2ページで構成される一場面のどこかに蝶々を追いかけているひよこが描かれており、それを探すのが楽しい。絵本の題名の「みんなでさがして」は、お話に登場するものたちだけでなく、読者に対しても呼びかけているようだ。また、画面の中に全部で8羽のひよこがいるかを数えながら読み進むのもいいだろう。

この絵本のお話はかくれんぼうそのものではないが、あたかもどこかに隠れているかのようなひよこを探すので、その要素を備えているといえよう。少しの間子どもが母親から離れて遊んだりちょっとした冒険をしたりするのは、母親への基本的信頼が確立しているからであり、かくれんぼうが始まる時期でもある。おそらく2、3歳の子どもは、ひよこに自分を投影しながら冒険を楽しむだろう。そして最後に、自分からみんなの前に出てくるのは、かくれんぼうでいえば、なかなか見つけてもらえずに心細くなった子どもが自分からオニの前に姿を現すのに似ている。なお、この絵本は、現在『うちのこみかけませんでしたか』(訳/はるみ こうへい)として出版されている。

(4) 『かげくのかくれんぼ』(リスト3-⑨)

最近あまり見られなくなったが、私が子どもの頃には「影踏み」という遊びをよくした。友だちの影を踏む、自分は踏まれないように逃げる、というごく単純な遊びである。屋外のちょっとした空間があれば、2、3人の小集団で遊ぶことができるので気軽に遊んだものだ。

主人公の男の子は、仲間と野球をした帰り道で、背後から差す夕日によってできた自分の大きな影に驚く。不思議なことに自分の影のかげくんは、男の子にいたずらをする。怒った男の子が影を踏みつけ

ると、かげくんは逃げだし隠れてしまう。かげくんをなかなか見つけられない男の子はついに泣き出してしまいが、最後には戻ってきてくれて一緒に帰っていく。

ユングは影について、「我々がペルソナ—俳優の仮面—によって隠していて決して世間には見せない顔」⁸⁾と述べる。私たちは、社会的に悪とされていること、あるいは、家庭や個人の価値観によって排除されていることを斥けながら生活している。結果それらは、意識下に抑圧され、影となる。河合隼雄の言葉を借りれば、影は、「その個人の意識によって生きられなかった反面、その個人が認容しがたいとしている心的内容であり、それは文字どおり、そのひとの暗い影の部分」⁹⁾となるのである。

この男の子の前に現れた影は大きく、また攻撃的であった。そこで男の子は踏みつけてやっつけようとする。まさに、影として抑圧されている攻撃性¹⁰⁾が顔を現し、自我との対決をせまったかのようなのである。しかし、影を攻撃することは、根本的な解決にはならない。影は男の子の反撃にあって逃げ出し、再び身を隠してしまう。ところが、そうすると男の子は不安になり、影を取り戻したくなる。なぜなら、それは自分の一部だからである。

影を受け入れることは困難ではあるが、みずからの人格の一面として認めようとする姿勢は、私たちの精神の成熟に必要である。ましてや影が自我との交流をなくしてしまえば、それはいっそう暗く強くなって、自我への反撃を企てることになりかねない。さらに河合が指摘するように、「影があつてこそ、われわれ人間に、生きた人間としての味が生じる」ともいえよう。この絵本は、かげくんに向かって「いっしょにかえろうね。」と語りかける男の子によって、影と葛藤しつつも自我に統合しようと努力することの大切さを伝えている。

〈リスト1〉

①『こどものとも年少版 みつけた!』作/甲斐信枝
福音館書店 2005年

花や草のなかにいる虫たちを見つける。

②『こどものとも0.1.2 はっぱのなかでみいつ

8) Jung, C. G. 林道義訳『元型論』紀伊国屋書店 1982年 56ページ

9) 河合隼雄『ユング心理学入門』培風館 1967年 101ページ

10) 攻撃性は破壊性や暴力と結びついて、一般的に悪のイメージを持たれやすいが、そればかりではない。鬼ごっこで必死に追いかけたり逃げたりすること、目的に向かって頑張ること、自分の意見を主張すること、困っている友だちを助けることなど、攻撃性がよい方向に発揮されることを忘れてはならない。

けた』作/ひろのたかこ 福音館書店 2005年
それぞれの葉っぱのなかに隠れている野菜を見つける。

③『こどものとも年中向き うみのかくれんぼ』作/吉野雄輔 福音館書店 2007年

海の中の魚たちが、あたかもかくれんぼをしているように写真で構成されている。

④『新自然きらきら9 かくれんぼ』写真/久保秀一文/七尾純 偕成社 2002年

二匹のカエルが、いろいろな植物の中でかくれんぼをする様子が写真とお話で構成されている。かくれんぼをしているときに会える昆虫も写真で紹介されている。

⑤『どうぶつなぜなぜずかん カメレオンはかくれんぼじょうず?』文/アニタ・ガネリ 訳/沢近十九一 草土文化 1993年

色々な生き物のカムフラージュが、写真と科学的な説明文によって紹介されている。

⑥『ずかんライブラリー 虫のかくれんぼ』作/海野和男 福音館書店 2003年

形や色を植物と一体化させてそこに上手に隠れている虫たちを写真で紹介している。

⑦『むしたちのかくれんぼ』文/得田之久 絵/久住卓也 童心社 2009年

オニになったミイデラゴミムシと、チョウ組、カブトムシ組等に分かれた虫たちがかくれんぼをする。絵本を楽しみながら、虫たちの生息場所や生態も知ることができる。

〈リスト2〉

★のついている絵本には、かくれんぼで掛け合う「もういいかい」「まあだだよ」「もういいよ」が文中に含まれている。

①『いないよいないよ』文/あまきみこ 絵/上野紀子 ポプラ社 1983年

かくれんぼで、男の子が木の陰に隠れている動物たちを見つけていく。ちょっぴりしっぽが見えているので、隠れている動物を想像するのも楽しい。最後は大きな木のまわりに集まったみんなに、作者の「みんなおおきくなーれ」というメッセージ届けられる。

②『年少版 こどものとも133号 かくれんぼしましょ』文/筒井頼子 絵/山内ふじ江 1988年

小さな女の子の一人遊びのかくれんぼ。優しい色彩の絵と愛らしい女の子の表情が暖かな雰囲気

醸し出している。最後はお母さんが見つけにきてくれる。

③★『みんなみーつけた』作/きしだえりこ 絵/やまわきゆりこ 福音館書店 1995年

オニの男の子が、いろいろなところにうまく隠れている動物たちを見つけていく。見つかった動物たちも男の子といっしょになって隠れている仲間を捜していく。最後はみんなを見つけれられる。

④★『うずらちゃんのかくれんぼ』作/きもともこ 福音館書店 1994年

うずらちゃんとひよこちゃんがかくれんぼをする。それぞれが交代で見つかりにくい花や実、きのこ等のなかに隠れる。いずれもオニによる発見ではなく、偶然のできごとで見つかってしまう。やがて雨が降ってきて、心細くなっていた二人をお母さんたちが探しにきて見つけてくれる。

⑤★『どうぶつあれあれえほん かくれんぼ』作/石川重遠 文化出版局 1972年

オニの犬が、ちょっと見つけにくいところ（保護色的）に隠れている動物などを見つけていく。みんなを見つけて、夕焼けの中をいっしょに帰っていく。

⑥★『どんぐりくんのかくれんぼ』作/まついのりこ 講談社 1990年

18人のどんぐりたちがかくれんぼをするお話。オニのどんぐりは、いろいろな森にかくれている仲間を見つけていく。最後はみんなを見つけて仲間がそろろう。

⑦★『もーいいかい まあだだよ』作/平出衛 福音館書店 2001年

土の中のきゅうこんぼうやとおおむしくんがかくれんぼ。おおむしくんがさなぎを経て蝶々になるまできゅうこんぼうやは「もういいかい」と待ち続ける。やっと「もういいよ」といわれて、今度はきゅうこんぼうやが土の中から芽を出し、チューリップになって、蝶々になったおおむしくんを見つめる。

⑧★『かくれんぼ かくれんぼ』作/五味太郎 偕成社 1987年

ねずみ、きつね、かば、ぞう、鬼のそれぞれのかくれんぼが重なって展開する。おおきなものの陰に順に隠れているので動物は見えないが、一番大きな鬼が見つかったために隠れられなくなり、大きい動物の順に見つかる。

⑨『こどものとも年少版5 ブルくんのかくれんぼ』

作/ふくざわゆみこ 福音館書店 2005年

かなちゃんが絵描きに夢中で遊んでくれないので、犬のブルくんはかなちゃんのぬいぐるみを持って隠れてしまう。ぬいぐるみを見つけれれたブルくんは、今度は自分が隠れる。かなちゃんが見つけれずに泣き出し、ブルくんは飛び出してくる。

⑩★『もりのかくれんぼう』作/末吉暁子 絵/林明子 偕成社 1978年

兄をおいかけてもぐり込んだところが不思議な森の中。けいこは、「もりのかくれんぼう」や動物たちとかくれんぼうをする。隠れているうちに、兄の歌でもとの場所にもどる。今の団地ができる以前、そこは森だったと兄が教えてくれる。神秘的な雰囲気を持つ「もりのかくれんぼう」との遊びは、異界でのできごとのように描かれている。森のいろいろな場所に動物たちがうまく隠れているのを見つけるのもこの絵本の楽しみである。

⑪★『わんぱくだんのかくれんぼ』作/ゆきのゆみこ・上野与志 絵/末崎茂樹 ひさかたチャイルド 1990年

仲良し三人組のわんぱくだんがかくれんぼうをしていた小さな公園が、昔そうだったという森になる。大きなかしの木に頼まれて、オニがどこかへ行ってしまったためにずっと隠れたままになっている動物たちを探し出す。その後、子どもたちが隠れる番になるが、気がつくともとの公園にもどっていた。動物の隠れ方が『もりのかくれんぼう』に似ている。

⑫『もりのなか』作/マリー・ホール・エッツ 訳/まさきりこ 福音館書店 1963年

男の子が一人で森へ散歩に出かける。次々に出会う動物たちが、みな散歩についてくる。動物たちがもってきたおやつを食べて、ハンカチ落としかくれんぼうをする。男の子が鬼になると、動物たちがいなくなり、探しにきていたおとうさんに見つけられる。かくれんぼうが中心ではないが、お話のなかで重要な役割をしている。

⑬『むしたちのかくれんぼ』文/得田之久 絵/久住卓也 童心社 2009年

じゃんけんでオニになったミイデラゴミムシがチョウ組、カブトムシ組などに分れた虫たちとかくれんぼうをする。絵本を楽しみながら、虫の生息場所や生態も知ることができる。

〈リスト3〉

①『カクレンボジャクソン』作/デイヴィッド・ルーカス 訳/なかがわちひろ 偕成社 2005年

恥ずかしがりやで一人暮らしのカクレンボジャクソンは、出かける時は必ずその場所にとけむような服を着る。ある日王様のパーティに招待された。お城で目立たない衣装を作り出かけたにもかかわらず、予想がはずれて目立ってしまう。しかし、その衣装のすばらしさに感動した王様やお妃をはじめとして、次々に洋服の注文がきて、ジャクソンは洋服屋になり、友だちもたくさんできる。

②『たまごのあかちゃん』文/かんざわとしこ え/やぎゅうげんいちろう 福音館書店 1987年

卵の中からどんな赤ちゃんが生まれてくるかを想像しながら楽しむ絵本。「たまごのなかでかくれんぼしてるあかちゃんはだあれ？」という問いかけがある。最後は、それぞれの卵から生まれてきた赤ちゃんが勢揃いする。

③『かくれんぼううさぎ』作・文/松野正子 絵/古川暢子 文研出版 1975年

こうさぎたちが耳だけをだして、草むらや花のなかに隠れている。蜂や狼が花や獲物と思ってやってくるが、危険をのがれる。詩的な文章と内容の作品。

④『かくしたのだあれ』作/五味太郎 文化出版局 1977年

身近な生活品が動物の絵のなかにうまく隠されていて、探し物と数の絵本が一つになっている。左ページで探し物をたずね、読者は右ページで探し物を見つけだす。右ページに登場する動物や虫たちは数が一つずつ増えていくので、めくるごとにページがにぎやかになり、探し物への挑戦が楽しくっていく。

⑤『きかんしゃトーマスのかくれんぼ絵本』原作/W.オードリー 絵/O.ベル 訳/まだらめ三保 ポプラ社 2005年

仕掛け絵本。動物園へ動物を運んでいるトーマスが、いろいろなところに隠れている動物たちと出会う。

⑥『ちいさなかがくのとも どどこかえる』作/杉田比呂美 福音館書店 2008年

8色のかえるたちがいろいろなところへ行く。自分と同じ色のところでは、まるでかくれんぼしているようだ。最後はそれぞれの部屋に帰っていく。

⑦-a『さがしてさがして みんなでさがして』作/ナンシー・タフリ 訳/とうまゆか 福武書店 1986年

⑦-b『うちのこみませんでした?』作/ナンシー・タフリ 訳/はるみこうへい 童話館出版 2000年

水辺のひよこが一羽、蝶々を追いかけて家族のもとからいなくなる。鳥の親子は、いろいろな水辺の生き物たちに尋ねながらいなくなった子どもを探し、最後に出会う。後者は訳者と出版社が変わって新たに出版されたもので、ことばのないページも増えることによって絵の力が大きくなっている。

⑧『ぼくのおさるさんどこ?』作/ディーター・シューベルト 文化出版局 1986年

ぬいぐるみのおさるを連れて公園にいった帰りになくしてしまう。ぬいぐるみはいろいろな動物たちにおもちゃにされ、あげくに川に落ちてぼろぼろになる。釣り竿にひっかかったぬいぐるみをおもちゃのドクターが持ち帰り元通りになおしてくれる。ぬいぐるみは、最後に子どもの手にもどる。絵だけで構成されている。

⑨『年少版こどものとも191号 かげくんのかくれんぼ』作/やまざきえいすけ 福音館書店 1993年
自分の影をやっつけようとしたり、追いかけてこをしたりするが、最後は隠れていた影が戻ってくる。

⑩『どうぶついろいろかくれんぼ』『のりものいろいろかくれんぼ』『たのしいおもちゃかくれんぼ』『おきがえいろいろかくれんぼ』『どうぶつもようでかくれんぼ』『くだものいろいろかくれんぼ』『やさしいいろいろかくれんぼ』『うみのいきものかくれんぼ』作/いしかわこうじ ポプラ社 2006、2008、2009、2011、2012年

カラフルな色彩で描かれ、その鮮やかな色の中から「形」が生まれる瞬間を体験できる赤ちゃん絵本。いろいろな形の穴のあいたページをめくると、隠れていた動物や乗り物などが現れる仕掛けになっており、「かたぬき絵本シリーズ」と呼ばれている。

⑪『かわいいかくれんぼ』作/わらべきみか フレーベル館 2002年

童謡の「かわいいかくれんぼ」の歌詞の通りにお話が進んでいく。

おわりに

本論では、かくれんぼうを題材にした絵本が、お話の中でこの遊びをどのように取り扱っているかについて調べた。かくれんぼう絵本の数はとても多く、この遊びがいかに作家や子どもたちの心をとらえているかが分かった。ここでは、その中の38冊を対象とし、1.自然の中のかくれんぼうをとりあげた絵本(7冊)、2.かくれんぼうそのものがテーマになっている絵本(13冊)、3.かくれんぼうと関連づけた絵本(18冊)の三つに分類し、それぞれの絵本の特徴や魅力、メッセージ等について考察した。

今回取り上げた絵本では、かくれんぼうの遊びそのものを中心に描かれている作品が分類2のなかに10冊あった。そのなかの8冊では、かくれんぼうに特有の「もういいかい」「まあだだよ」「もういいよ」の言葉の掛け合いがみられた。このことは、かくれんぼうを正しく伝承するうえで大切な要素といえよう。そして、対象にした絵本の多くには、遊びそのものの描写を超えて、「隠れる」「探す」「見つけてもらう」「異界を旅する」「再会」「自我の成長」といったかくれんぼうが内包する様々なテーマが織り込まれていた。また、いずれも乳幼児向けなので言葉は少ないが、各絵本に描かれた絵が、かくれんぼうのメッセージをみごとに表現していた。子どもは実際の遊びだけでなく、これらの絵本が描き出す世界のなかでも、かくれんぼうのテーマを心に刻むことができるといえよう。

参考文献

- 1) Biedermann, Hans 藤代幸一監訳 『世界シンボル事典』八坂書房 2000年
- 2) 泉鏡花『竜潭譚』岩波文庫 1987年
- 3) 河合隼雄『ユング心理学入門』培風館 1967年
- 4) Jung, C. G. 林道義訳『元型論』紀伊国屋書店 1982年
- 5) Lummis, C. D 加地永都子訳 『影の学問 窓の学問』晶文社 1982年
- 6) 中川香子『子どもと悪Ⅰ一遊びと習俗に探る』聖和大学論集第27号A 1999年
- 7) 中川香子『かくれんぼう』人文書院 1993年
- 8) Samuels, A. 編 小川捷之監訳『父親』紀伊国屋書店 1987年
- 9) 山口真美『赤ちゃんは顔をよむ』紀伊国屋書店 2003年